

～内なる感覚を探り、声で人物の存在をつくる。

これほどまでに、演じる役柄の心情を伝え、聞く者の想像力をかきたてる「声の魔法」は、一体どのように生まれるのでしょうか？その奥義について、出口さんにお話をうかがいました。

「声は、その人物の存在そのものだと思うんです。」

とても穏やかで、あたたかな声で話してくださいました。

『私たちが耳で聞いている声は、実は声のほんの一部で、外に現れている部分。それが現れる前の、内に隠れている声に耳を傾けて、その声を探る感覚を、私はとても大切にしています。オペラでは、何よりも、人物の「声づくり」が重要です。役の人物を感じ、役と向き合い、体の内で感じた感覚を、素直に、自分が心地良いと感じるように声で表すことを心がけています。』

そして、にっこりと笑って続けました。

『私にとっての役作りは、声でその人物の存在をつくり表すことなんです。人物の軀をつくることはできませんが、声ならつくれます。そう考えると、「声」って、とっても面白いと思いませんか？』

なるほど！すると、あの「声の魔法」の正体は、まさにマクベス夫人の情念そのものだったのかもしれない。そして、演じる出口さんは、その情念が乗り移った現れの姿？益々、深淵なる声の表現世界に興味を湧いてきました。ちなみに、その時の舞台は、出口さんがマクベス夫人を演じた初めての舞台だったのですから、さらに驚きです。～

「creabeaux (クレアボー)」77号 (フレグランスジャーナル社刊) 連載記事：「アート&ビューティー 美の瞬間」より一部抜粋掲載させていただきました。是非、誌面でお読みください。